

書評 01

高村勳 随筆集

『生協人間』

「高村勳さん追悼展」実行委員会
2015 年 7 月刊 / 128 ページ / 1,000 円 (税込) + 送料

評者：杉本 貴志
関西大学商学部教授



本書には、1970 年代末から 2010 年代までに執筆された日本の生協のリーダーによる人生と生協の回顧と展望が収録されている。

この限られた書評において、60 本にも及ぶ随想の内容を逐一紹介することはとてもできない。そこでここでは、おそらくは多くの読者が関心を持つと思われる、戦後昭和の生協運動のリーダーとして著者がいかなる考えをもって神戸と日本の生協をいかに導いてきたのかというテーマに絞って、本書を紹介させていただきたい。

1 灘購買組合と賀川豊彦

著者・高村勳氏がコープこうべの前身「灘購買組合」に就職したのは敗戦後まもなく、1946 年のことである。宮崎の飛行場で本土決戦用の対戦車砲部隊にいた著者は、敗戦処理後に復員し、神戸商業大学に復学するが、十分な学業を受けられず、「1 年で追い出し卒業させられた」という。そして新人を採用するような企業がほとんどない時代、仲良しの同級生の親、田中俊介組合長に強く勧められ、生協のことなどほとんど知らずに入ったのが灘購買利用組合だった。

「そんなある日、新入生教育の資料として与えられたのが賀川豊彦の『協同組合の理論と実際』であった。掌中に入る判で僅か 58 頁のこのザラ紙の論文、主張が私に与えた衝撃は大きかった。…賀川の人間観、世界観そして協同組合にかける彼の使命感にたちまちにして引きずり込まれ、囚われの身となった。この小冊子に

よって腰掛けのつもりがとうとう 50 年もこの生協で働き続けることになった。」

コープこうべの創立者が賀川であることは誰でも知っている。その生協を長らくリードしてきたのが著者なのであるから、こうした傾倒は当然であると受け止めるべきなのかもしれないが、このような賀川への言及や敗戦直後の生協における仕事の描写（「毎日の朝礼は『祈り』に始まり、『御国を来らせたまえ』と真剣に祈ることで、困難の日々を乗りこえてきた」）から、いまではほとんど感じ取ることができなくなってしまった神戸における生協運動の原点をわれわれは垣間見ることができるのである。

2 灘神戸生協の発展

その後の著者のモーレツな働きぶりは、巻末に取められた『神戸新聞』の連載記事「トップの肖像」からもうかがえる。生協自体も、1970 年代から 80 年代にかけて飛躍的発展を遂げることになるが、1982 年に書かれた学生の就職活動についての一文にも、現下の状況と比較して隔世の感を抱く生協関係者が多いのではないか。

「就職シーズンである。今年は 65 人の大卒募集に対し、約 1900 人が資料を求め、最終 567 人が受験した。…『なぜ、当生協を志望しましたか』の問いに『消費者組織に支えられ、しかも営利企業でない生協に働きたい』というのがほとんどの答えであった。採用が内定した人々は立派な青年たちであるが、この若い日々の理

想への情熱を、生涯に貫いてくれるだろうか。」

この後、まさに著者に先導されて、灘神戸をはじめとする大規模生協は大型店舗によって正面からスーパーマーケットに対抗できる流通事業体に成長していく。

ただし、「高村学校」と呼ばれ、そのスーパーマーケット戦略のみが注目されがちな著者の生協観には、それだけでは取まりきれない戦略・展望があったことにも、本書は気づかせてくれる。「生協はただいいものを安く安心して買い物をするための機関ではなく、生活文化や社会福祉の領域での活動をもっともっと充実してゆかねばなりません」というのは、1979年の言葉である。これは2003年の「生協の目的は地域の生活者の安全・安心を守ることにあるので、なすべきことはいくらでもある。流通にこだわらず生活要求の変化にもっと目を向けるべきだろう」という主張とも一貫している。

3 日本生協連会長として

それでも、チェーンストアとしての生協の発展に力を注いだ指導者であるというのが、著者に対する一般的なイメージであることは否定できないだろう。それは、灘神戸生協だけでなく、日本生協連の会長理事として、それまでほとんどともに機能していないといってもいいような状態だった生協とその連合会の事業面でのマネジメントに著者が初めて手を付けたことによるものである。しかし、それと同等に特筆すべき高村日本生協連会長の功績は、政府・自民党による「生協規制」への対処であったろう。

「85年7月、大単協のトップ数人が自民党の本部に呼ばれた。ある程度覚悟はしていたが話し合いというようなものではなく冒頭から一方的に大声で怒鳴りつけ、入れ替わり立ち代わり脅しあげるようなことで、こちらの主張も弁明もまったく聞く耳をもたないままで引き上げざるを得なかった。」

そこで厚生省は「生協のあり方に関する懇談

会」を立ち上げ、有識者と生協界及び小売業界代表からなる15人の委員が厚生大臣の私的諮問機関として実地調査と討議を重ね、1986年12月に報告書を提出するに至るのである。小売業界の代表者が憤激して退席するような、生協に理解を示す内容の答申案が出来上がったのは、忍耐強く問題に丁寧に対処した高村会長の努力の賜物でもある。生協を排撃する反生協運動は、洋の東西、時代を問わず、常に見られるものであるが、この時以来、国内では生協を公然と攻撃するような勢力は鳴りを潜めている。

「少なくとも生協を敵にはしたくないという態度に転換した。員外利用問題で生協を締め付けようとしたことで生協は利用者の100%を組合員にしようと努力したため、生協の組合員は急激に増えて事業も拡大発展した。とりわけ私が嬉しかったのは、この時期に、生協にマスコミ沙汰になるような事件事故の類がまったくなかったことである。」

襟を正して読むべき一文であろう。著者は師・賀川の協同組合論を越えた生協を実践の中でつくりあげたが、その生協を乗り越える新たな協同組合はいつ、どこで生まれるのだろうか。

書籍注文先：

①追悼展実行委員会事務局 橋口文博

E mail:f-hassy@nifty.com

② facebook のページ

<https://www.facebook.com/seikyoningin/>

③郵便振替口座に代金(送料込)をお振り込みください。(手数料はご負担ください)

※送料4冊までは100円、5冊以上は500円

加入者名：水落稔(ミズオチミノル)

口座番号 00930-5-275675